

くまもと面白漫遊記

～吉田委員のおすすめのこの町・この人～

No.15 宇城地区

砥用の水・地球の水・いのちの水

～砥用活性化研究会・鳴瀬信一さん～

鳴瀬さんは言う。

『水にこだわると山に行き着く。

だから、山に還ってもらいたい。

田舎に住む人がいなくなったら、すべてダメになってしまう…』

砥用町の「水」をテーマにした活性化活動は

「地球の水」へつながり「いのちの水」へと還ってくる。



砥用活性化研究会の手作り施設ロビンフットの森



会長：鳴瀬信一さん



どんど祭り（毎年1月）

「水」にこだわる町おこしは 砥用から地球に向け鳴らし続ける警鐘！

下益城郡砥用町、人口約7900人の町は8割が山林、昔から農林業を中心として発展してきた町だ。しかし、過疎化が進む中、(私有林を持つ)林業の後継者はわずか数人となり、町の基幹産業は危機に陥っている。

山の危機は、水の危機である。山の保水力の低下により、川の水量は減少し、汚染もすすんでいる。これまで砥用町にとって無用だった「水の大切さ」が今、大きな課題となって町民の暮らしだけでなく、砥用町の未来に関わってきたのである。『その状況を“時代による変化”という一言で済ませてはならない。』と立ち上がった人々がいる。

『砥用活性化研究会』——平成4年に熊本県の過疎化対策事業の一環として結成され、2年間にわたり町おこしに関する研究、事業を行った。その後、町が独自で組織を再結成、現在、新たなメンバーを加えて15名。自営業、会社員、役場職員など23歳から51歳まで、砥用町の将来を見い出すべく活性化への提案、事業を積極的に行っている。

砥用活性化研究会の目的は、当然「町おこし」である。しかし、単に人を呼ぶイベントや施設づくりにとどまらない。そのキーワードとなるものは「水」。水にこだわり、水に取り組み、水が砥用の未来を語るという、研究会のコンセプトには、砥用町から熊本県へ、日本へ、そして、地球へと発信しているパワーを持っているのだ。

会長の鳴瀬信一さん(51歳 リブ・アップ・プラザ・ひげや社長)は、結成当時から会長を務め、砥用の未来を様々な角度から見つめながら、持ち前のバイタリティと情熱、そして、抜群の行動力で、メンバーや町民を引っ張っ



ている。黒く日焼けした顔にヒゲが印象的な鳴瀬さん、その熱い眼差しに圧倒される。

今回、砥用活性化研究会のメンバーである砥用町企画観光課長の福田賢二さん、前建設業協会特別広報委員の西村潤次郎さんも同席。鳴瀬さんと共に、砥用の近未来を語ってくれた。聞き手は広報委員の吉田桂佑さん（株式会社吉田産業 専務取締役）。

吉田委員 Q：まずは、「砥用活性化研究会」のテーマを教えてください。

鳴瀬さん A：「水」をテーマに考えようということです。

つまり、山の保水力が著しく低下し、いずれ水不足が起こります。地下水をつくっていく、自然の流れを作っていくことが必要なんです。

緑川や多くの支流、緑川ダムや船津ダムを有する砥用町は比較的「水」には恵まれてきました。

しかし、川の水の減少、汚染がすすみ、このままでは水が危ないと感じます。

もっと「水」を勉強しようということです。

吉田委員 Q：「水」へのこだわりは、鳴瀬さんが砥用を見つめてきたからこそ、出てきたテーマなんですね？

鳴瀬さん A：田舎に住んでいると20年の移り変わりがよく分かります。砥用の川の水は、20年で5分の1になってしまいました。森は（できるまで）100年かかります土が残っているうちに「水」を作っていないとダメなんです。今、水を考えなければ、やがて、この日本からも水がなくなってしまう。

吉田委員 Q：「水」「山」の関わりを見ていくということですね。

鳴瀬さん A：河川の汚染の原因は「山」にあります。

山を守る、河川をいじらない、生態系を変えない。

みんなが考えるくれるように、いろんな提案をしていこうと思っています。

吉田委員 Q：「町おこし」へのつながりは？

鳴瀬さん A：田舎に人が住まなくなったら、すべてがダメになってしまいます。「水」をつくること、森をつくること、そのために「人が住める町づくり」をしなければなりません。これが「町おこし」の出発点です。

活性化研究会が作ったロビンフッドの森 子供たちに遊びの中で自然の大切さを！ 活動広がる活性化研究会

吉田委員 Q：これまで研究会で実施された事業は？

鳴瀬さん A：水の浄化実験、水を電気分解して生じる酸性水やアルカリ水を医療用や農業用として活用したりしました。

福田さん A：「炭」を使って川の浄化実験も行いました。
ドラム缶に「炭」を入れ、川に入れておけば、1週間か10日で川がきれいになるんです。
ただし、維持管理が大変、目詰まりをするんです。
その結果、町民が川に物を捨てなくなりました。
川に対する意識は高まったと思います。

吉田委員 Q：「ロビンフッドの森」とは？

福田さん A：活性化研究会が手づくりで緑川ダムに作った子供たちの施設です。国の予算と町有林の提供を受けました。
国（国土交通省）と町と民間が一体となって作ったものです。

鳴瀬さん A：子供たちに自然の中で遊んでもらいながら、自然の大切さを学んでもらおうと小学生を中心に提供しています。
その他、小学校へ行って、川遊びの仕方や水鉄砲の作り方などを教えています。



吉田委員 Q：砥用活性化研究会の活動が広がっていますね？

鳴瀬さん A：3年前から「みどりか湖どんと祭」を開催しています。大型クレーンを持ち込んで、20メートル近いやぐらを組み立て、点火しました。
その他「緑川ダムフェスタ イン砥用」「やまびこ祭り」「緑川一斉清掃」など他の団体と一緒にイベントに協力しています。

鳴瀬さんのバイタリティに脱帽！ 活性化研究会の目ざすもの 「いらっしゃい！」と言える町づくりを

吉田委員 Q：町側の立場としては、鳴瀬さんの活躍はいかがですか？

福田さん A：町としては非常に助かっています。祭りの時など提灯の飾り付けもやってくれるんですよ（笑）。砥用太鼓も叩いておられるし、積極的に町の事業に参加してくれて、しかも、鳴瀬さんは町の合併を協議する委員も務めていらっしゃるので、大変だと思います。



吉田委員 Q：鳴瀬さんのバイタリティはどこから？

鳴瀬さん A：いろんな事をやってみようという、それだけです。
意見発表だけではなく、実行しないと。
とにかく、砥用町を人が住む町にしたい。
「町おこし」は時間がかかります。頑張るために食うことも考えなければなりません。
水、山のためにも、豊かな暮らしのために第一次産業を活性化させることが復活のキーワードだと思います。
そのため、県産材の利用を増やし、山で働く者を増やす事も大切です。
ダチョウを飼って、産業に結びつけられないかなど、いろいろ実験しています。

吉田委員 Q：低用活性化研究会のこれからの活動は？

福田さん A：住民が元気よく暮らせるように、それが基本です。
空き家がないか？住めないか？という方々が増えたら面白いと思います、それまでに、「いらっしゃい！」と言えるような町を作っておかなければなりません。

鳴瀬さん A：森と上手に共存できるんです。
森の中に家を建てたいという人が出てきて欲しいですね。今、山は保水力がなくなったが、自然林に還れば、谷川の水は復活します。
昔の豊かな暮らしを取り戻したいんです。

鳴瀬さんは、とにかく熱い人である。おそらくは、体が幾つあっても足りないほどの忙しさであろう。そんな中で、常に低用の未来に目を向け、昔の低用を取り戻そうと、頑張っている。そう、鳴瀬さんの町おこしの原点とは《子供だった頃の低用》なのである。人間にとって、地球にとって最も大切な「いのちの水」を叫びながら、低用から地球へ向けて警鐘を鳴らしながら、あの豊かな時代へ向けて、今日も走っていることだろう。



西村さん

吉田委員

福田さん

鳴瀬さん